風に恋う（1）

（千間学院高校吹奏楽部は、吹奏楽コンクール西関東大会で推薦団体に選ばれ、全日本への出場を決めました。本番の前日、コーチの不破瑛太郎は一年生の茶園基と三年生の鳴神玲於奈だけを練習会場の体育館に残し、ソロパートを決める最後のオーディションを行います。）

「私が先に吹きます」

玲於奈がそう宣言し、※オーボエのリードを口に咥える。息を吸う音に、天井から響いていた雨音が掻き消された。①じっとりと湿った体育館に木漏れ日が差すみたいに、オーボエが歌う。同じソロなのに、同じ音符を追っているのに、自分が吹くのとは全然違う。

【やっぱり、祈りだ。最後のコンクールでソロを吹き切って終わりたいと願う音。新しい場所へ行くから、自分の過ごした場所を名残惜しく撫でる。そんな演奏だった。】

でも、それでも、ソロは僕が吹きたい。玲於奈の演奏を聞き届け、基は楽器を構えた。

「玲於奈」

※サックスを抱きしめて、二歳年上の幼馴染みの名前を呼ぶ。同じものに憧れて、一緒に吹奏楽を始めた、幼馴染みを。

「見てて」

自分がそう言えば、玲於奈は、絶対に見ていてくれる。オーボエを両手で抱えて、玲於奈は基の方へ体を向けた。正面から、基を見た。

マウスピースを口に含んで、息を吹き込んだ。胸の中に滞留する精一杯の祈りを、音にのせる。自分は不破瑛太郎と音楽を続けるために全日本のステージに立つ。ソロを吹く。お前にはあと二年ある。玲於奈に譲ってやればいいのに。耳の奥で、そんな声がする。西関東大会が終わってからずっと、②そう思う自分がいた。弱い自分。優しい自分。でも、やっぱり弱い自分。

最後だとか、来年もあるとか、そんなんじゃない。この時間は、いつ終わるかわからない貴重で愛しいものなのだ。

玲於奈と一緒のコンクールは、明日が最後だ。だから僕は、全力で玲於奈に勝つ。

最後の音の残響が、いつもより長く聞こえた。がらんとした体育館のフロアに響き、遠くから雨音が忍び寄ってくる。

「ありがとう」

瑛太郎の声に、基ははっと我に返った。

彼は静かな目をしていた。でも、歯を食いしばっているのがわかった。

その目が、玲於奈へ向く。

「すまない」

③間髪入れず瑛太郎は言った。擦れ声で、ガラスを噛み砕くような苦しそうな言い方で。

そしてすぐに基へと視線を移し、言った。

ソロはお前だ、と。

（額賀澪『風に恋う』文藝春秋　による）

※オーボエ、サックス…いずれも管楽器の一種。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 【 】の箇所(かしょ)の表現について、正しく述べたものを選びなさい。

ア 玲於奈の視点から、演奏に込める思いを述べている。
イ 基の視点から、玲於奈の演奏に感じたことを述べている。
ウ 瑛太郎の視点から、競(きそ)い合う二人の姿を述べている。

〔　　〕

(2) ――線①「じっとりと湿った体育館に木漏れ日が差すみたいに、オーボエが歌う」とあるが、この表現について正しく述べたものを選びなさい。

ア 体育館の外で降っていた雨が上がり、空が晴れ渡(わた)る様子を写実的に表現している。
イ 玲於奈が演奏に込める祈りの強さを、倒置(とうち)を用いて強調して表現している。
ウ オーボエの美しい音が体育館に響く様子を、直喩(ちょくゆ)と擬人法(ぎじんほう)を用いて表現している。

〔　　〕

(3) ――線②「そう思う」とあるが、「そう」が指す内容が書かれた一続きの二文を探し、最初と最後の三字を答えなさい。ただし、句読点も一字に含む。

□□□～□□□

(4) ――線③「間髪入れず瑛太郎は言った」とあるが、このときの瑛太郎の様子として適当なものを選びなさい。

ア 二人の演奏がともに素晴(すば)らしいものだったため、基と玲於奈のどちらをソロに指名するか決めかねて途方(とほう)に暮れている。
イ 演奏の出来(でき)から基をソロに指名することを決めたが、玲於奈にも奮起してほしいとあえてきびしい態度をとっている。
ウ 基がソロにふさわしいと思うものの、最後のコンクールに臨(のぞ)む玲於奈をソロに指名しないことを、つらく感じている。

〔　　〕